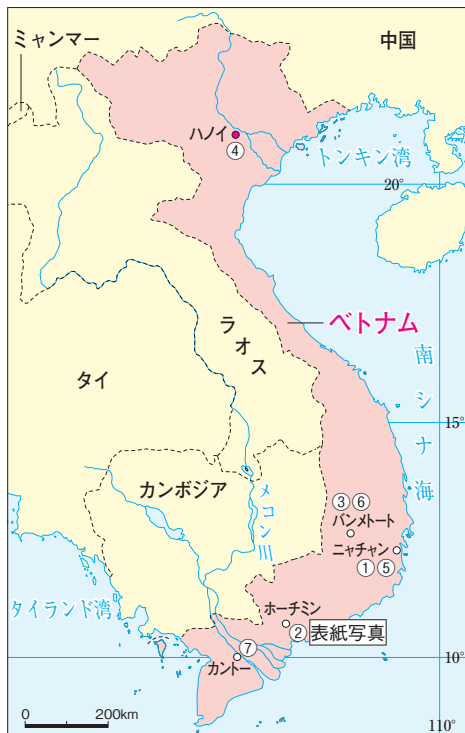




ベトナム社会主義共和国 基本情報(2022年)
 🏠 首都: ハノイ 🧑 人口: 約 9946 万人 🗺️ 面積: 約 33.1 万km² 🌡️ 年平均気温: 24.7℃ (ハノイ)



日本にとって身近になりつつあるベトナム。経済発展が著しく、訪れた各地でその勢いを目の当たりにした。都市によって気候や街並み、食文化が異なり、短期間の取材であったが、ベトナムの人々の生活に魅了された。



東南アジア有数のバイク天国

ベトナムでは、増加する人口に対して交通インフラの整備が間に合わず、現在も主な交通手段はバイクのままである。現在のバイク登録台数は5000万台以上ともいわれ、大都市の道路はバイクであふれている(表紙写真)。ベトナムでは、バイクのことを「ホンダ」とよぶほど、低燃費で壊れにくいホンダ車の人気が高い。またがらずに乗れるスクータータイプのバイクに乗る人も多く、渋滞をものともせず、颯爽と駆け抜けていく。そのため、大通りでは絶え間なくクラクションが鳴り響き、排ガスによる息苦しさをを感じる。バイクに乗る人が身に着けているマスクやスカーフは、排ガスから身を守るため、新型コロナウイルス感染症の流行前から使われてきた。近年では、脱炭素化を意識した電動バイク(写真①)や電気自動車も増えている。

このような渋滞を緩和するため、都市部では新たな鉄道の建設が進められている。ハノイでは2021年に1路線が開業したが、乗り換え路線が未完成のため、渋滞の根本的解消には至っていない。日本企業も参加するホーチミンの地下鉄は建設が遅れていたが、今年7月に最初の路線が開業予定である。地下鉄の駅入口の建物(写真②中央)には、日本とベトナムの国旗が飾られている。



①



⑦



③



④



⑤



⑥



コーヒー生産国と消費国 二つの顔を持つベトナム

コーヒー豆の生産量・輸出量において世界第2位を誇るベトナム（2021年）。この国で生産されるコーヒー豆はロブスタ種（写真③）が主流で、苦みが強く、日本ではインスタントコーヒーや缶コーヒーの原料となることが多い。

フランスによって植民地化されたベトナムでは、カフェ文化が定着している。街には多くのカフェがあり、時間ができると家族や友人とカフェでくつろぐのが定番だという（写真④）。ベトナムには、スターバックスなどの外資系チェーンも進出しているが、ベトナムコーヒーは独自のスタイルを確立しており、人々の暮らしに根づいている。

ベトナムコーヒーは「フィン」とよばれる器具で苦めのコーヒーを抽出し（写真⑤）、甘い練乳を入れて飲むのが伝統的なスタイルである。牛乳が高価で入手困難だったころ、代わりに練乳を入れたのが始まりだといわれる。取材班も飲んでみたところ、日本で飲むコーヒーに慣れた舌にはかなり甘く感じた。また、卵を入れたエッグコーヒーも試してみた。顔にコップを近づけると生卵が一瞬香るが、飲み込むと甘さとまろやかさが広がる、経験したことのない味であった。苦みの強いロブスタ種の生産地だからこそ、コーヒーに何かを混ぜることで独

自の発展を遂げてきたベトナムのコーヒー文化。今後も注目していきたい。



豊かな食を支える米

世界有数の米の生産地でもあるベトナムでは、フォーや生春巻きなど、米を使った料理が有名である。なかでも取材班の印象に残ったのは、中部が発祥とされるコム・ガーという料理だ（写真⑥）。鶏のゆで汁で炊いた米に、ゆでたり揚げたりした骨付きのとり肉が載せられており、それを崩しながら米と一緒に食べると、優しいとり肉の旨味を感じられる。

ベトナムの米もおいしいなとほおぼっていた取材班だが、国内には複雑な事情もあるようだ。米の一大産地、南部のメコンデルタ（写真⑦）では、生産量を増やすために二期作や三期作が行われている。三期作になると、稲が十分に実る前に収穫することもあるが、この米はアジアやアフリカなどへの輸出用なのだという。その代わりに、国内ではカンボジアから輸入した米もよく食べられている。ところ変われば、食料問題も変わる。意外なベトナムの米事情に驚いた。

帝国書院
取材班が
行く！は
こちらから▶



写真は
こちら
から▶



動画は
こちら
から▶



写真：2023年8月撮影／帝国書院